私の車いす生活　～中部労災病院を退院して～　リハビリテーション科・社会生活講座より

スポーツへの挑戦、そして仕事への復帰

安田　好孝
46歳・会社員・頚髄損傷

入院までの経緯

私は、綜合警備保障で現金輸送の仕事をしていました。2002年11月、強盗の襲撃に遭い頚部と足を撃たれ、外傷性頚髄損傷でN大病院に緊急入院、手術とその後のリハビリのために中部労災病院に転院しました。しかし検査ののち、手術の必要はないこと、そして四肢麻痺の障害が残ることを告げられました。

リハビリ

障害が残ることにショックはありました。でも、とにかく一日も早く家に帰りたかったので、まじめにリハビリに取り組みました。何もできない体のまま家に帰るわけにはいきませんから。

退院後

即仕事復帰は会社の環境も整っていなかったので、家での生活が中心でした。病院のように規則正しく管理された環境ではないので、何もしなければそれなりの一日が過ぎてしまいます。

妻が体力の低下を心配して、散歩や買い物と言って、とにかく外出に誘ってきました。それしかすることがなかったとはいえ、きつかったですね。舗装道路一つとっても車いすでは走りづらいものです。

スポーツ、アーチェリーに出会う

受傷前にやっていたスポーツジムでトレーニングをしたり、学生時代に経験のある卓球をやってみたりしました。車いすでもできるのですが、健康であった自分と比較してしまって、出来ないところにばかり目がいってしまい楽しくなかったです。

そんな時、障害者スポーツセンターでアーチェリー教室の開催を知り参加してみました。自分は握力がありませんから、弓を手にぐるぐるに縛り付けて、矢をセットするのも全部介助してもらう状態ですが、その時先生は「いい目をしている。」「出来る。」と言ってくださいました。障害のためにできなくなってしまったとあきらめることが多い自分に、それでも出来ることならやってみよう、続けてみようと思いました。

自宅での練習風景

障害があると特になのかもしれませんが、情報はとても大事です。知らなければ出会えないこと、気付かないことがあったら、それだけ自分の世界が狭くなってしまいます。

仕事の復帰

入院中、このまま社会とのつながりがなくなってしまうのでは、という不安があり、どこまで回復するかわからないまま、それとなく復帰の希望を伝えていました。会社も前向きに検討してくれましたが、施設がバリアフリーではなかったので、復帰は当分ないなと思っていました。が、しばらくすると、エレベータのあるビルに移転が決まり、改装時に身体障害者用のトイレも作られ、本人が思うより早く復帰の運びとなりました。

受傷前のような外回りはもちろん出来ませんので、内勤に配置転換してもらいました。自分の体調に合わせて仕事ができるように、会社と話し合いながら勤務を続けています。

頚髄損傷になったことは決して喜ばしいことではありません。悲しい思い、厳しい体験を数多くしてきました。しかしその裏で、頚髄損傷になったから経験できていることもあります。

受傷前の私は、とにかく仕事一筋。普通のサラリーマンでした。それが今では、車いすですが自分で車の運転もできるようになり、障害者として会社に行きます。アーチェリーの試合があれば長野・神奈川・埼玉・大分等、今まで出かけたことがないところまで行くようになりました。

入院中には思いもしなかった今があるのは、多くの人々に支えられているということに日々感謝し、これからも前に進んでいけたらと思います。

的までの距離
手前18m・奥30m

＊＊＊　リハビリテーション科・社会生活講座とは　＊＊＊
入院患者さん向けの生活支援応援会。社会復帰して活躍されている脊髄損傷者の方に、地域社会での生活について情報提供してもらうピアサポートの場。患者さん・ご家族の元気力アップと悩み解決に役立つ講座となるよう活動しています。